



文學博士 實方 清 著

關西學院大學  
研究叢書 第一篇

日本文藝理論  
風姿論

弘文堂刊

---

# 日本文藝理論

---

---

昭和31年4月30日 初版発行

定価 650円

著者 実方清

発行者 八坂武太郎

印刷者 鈴木才治

---

東京都千代田区神田駿河台  
発行所 振替東京53909番  
電話 神田 0670 1083 2752

株式会社 弘文堂

---

落丁 乱丁等にはお取換申します

(鈴屋印刷 石毛製本)

## 序

日本文藝の本質と價値とに對する認識は古來極めて多い。記紀萬葉に於ける文藝的自覺から始る日本文藝論は中古に於て成立し、中世に於てその本質的展開がみられ、文藝の本質と價値とは全き相に於て認識されたと云へるであらう。文藝は言葉や文獻の世界ではなく、それを通して認識される文藝性としての美的世界にあるが故に、文藝理論の認識なくして文藝の學的把握はあり得ない。文藝を單に鑑賞し批評するだけではなく、これを學的對象として究明しようとする時は、美學がその基礎學として要請されるのであるが、文藝理論は文藝研究に密接に關聯しその内的必然性を規定するものである。文藝理論は文藝の本質と價値とに對する美的認識であるからそれ自體が文藝の本質的認識に關與し、また一方では文藝研究の基礎となり、必然性を與へるものでもある。文藝の本質と價値の確定が文藝學の任務であるとすれば、文藝理論はその任務を擔ふものでもある。この故に文藝學に於て、文藝理論は内的必然性と基礎とを與へるものであると云へる。この意味から考へても、文藝學に於ける文藝理論研究の位置は極めて高いのである。

日本文藝理論は日本文藝の本質と價値とに對する抽象的認識である。個々の作品に對する評價は未だ具象性の世界であつて抽象性の世界を構成しない。歌合判詞は具象性の世界ではあるが、これ等の判詞を綜合して見る場合そこに文藝理論としての抽象性の世界が認められるのである。本書は日本文藝理論研究の第一卷である。日本文藝理論の中心を形成して居る日本抒情文藝理論を取り上げ、和歌・連歌・俳諧に互つてその「すがた」の問題を、その歴史性の認識を通して本質性を規定したのである。本書の内容は「風姿理論の研究」である。日本抒情

文藝の世界に於て、抒情性の構成の中で極めて重要な部分を形成して居る「すがた」即ち風姿の本質と價值とを究明したものである。風姿の問題は歌論が中心であるが、更に連歌論と俳論とに於て風姿と風情の本質關係をも考察した。能樂論に於ては風姿といふことが重要な美的理念として説かれて居るが、能樂論を日本文藝理論の中に入れることは困難なので省くことにした。これは別に日本藝道論に於ける風姿の問題として考へて居る。この風姿理論をその歴史性と本質性との綜合把握の中に考へたのは昭和十二年七月「國語國文」に掲載した「歌論に於ける姿の本質」といふ論文に於てである。この理論を考へ始めたのは昭和七年からであるから、本書に至る迄二十有餘年を経過して居る。従つて二十數年考へて來た問題を本書にまとめたといふことになる。日本文藝理論の研究は、日本文藝の研究と並行して私の終生の事業として進めて行きたい。本書に次いで幽玄の美的本質を究明した「幽玄論」「しらべ」の本質を究明した「格調論」餘情・景氣・面影の本質を究明した「餘情論」は既に用意が整つて居る。更に虚實論・寫生論・風體論・風情論に次いで物語論と戯曲論とを考へて居る。これが出來上つて「日本文藝理論の體系」が一應完成するのである。私はこの體系完了の近きを期してこの探求の道をひたすら進みたいと思ふ。このきびしい學問の道を進むにつけ、恩師岡崎義惠先生の御學恩を今更の如く感じ、茲に感謝の念をあらたにするものである。

本書は「關西學院大學研究叢書」第一篇として出版することになつた。かゝる學術研究書の出版について特別の好意を示して下さつた關西學院大學と弘文堂とに對して感謝の意を表したい。

昭和三十一年三月三十日

實 方 清

# 目次

序 説……………一

第一篇 歌論に於ける風姿の理論……………一三

第一章 風姿理論の源流……………一五

一 記紀萬葉に於ける體の概念……………一五

二 歌經標式に於ける體の概念……………二四

三 古今序に於ける心と「さま」……………二八

四 公任の歌論に於ける心と姿……………四三

第二章 風姿理論の展開……………五三

一 中古末歌合判詞に於ける風姿……………五三

二 六條家歌論に於ける風姿……………六三

三 俊成の歌論に於ける風姿……………七四

四 三體和歌に於ける風姿……………一〇六

五 歌林苑派の歌論に於ける風姿……………一二〇

六	定家の歌論に於ける風姿	一三一
七	景樹の歌論に於ける風姿	一六一
第三章	風姿の美的内容	一七五
一	あはれなる姿	一七七
二	いうなる姿	一八五
三	えんなる姿	一九四
四	やさしき姿	二〇五
五	をかしき姿	二一一
六	長高き姿	二一七
七	さびたる姿	二二三
八	幽玄なる姿	二二七
第四章	風姿と風情の本質	二五一
一	風姿と風情の概念	二五一
二	顯昭に於ける風情の説	二五九
三	俊成に於ける風情の説	二六五
四	新古今時代に於ける風情の説	二七一

五	新古今以後に於ける風情の説	二八〇
	第二篇 連歌論に於ける風姿の理論	二八九
第一章	連歌の本質と連歌論の發生	二九一
一	連歌の發生と本質	二九一
二	連歌論の發生	二九五
第二章	良基の連歌論に於ける風姿と風情	二九八
一	良基の連歌論書	二九九
二	連歌論に於ける諸問題	三〇三
三	連歌論の世界	三一〇
四	連歌論の美的本質	三一七
五	連歌論に於ける「かゝり」と風姿・風情	三二六
第三章	梵灯庵主の連歌論に於ける風姿と風情	三三五
第四章	宗砌の連歌論に於ける風姿と風情	三四一
第五章	心敬の連歌論に於ける風姿と風情	三四六
第六章	宗祇の連歌論に於ける風姿と風情	三五一

第三篇 俳論に於ける風姿の理論……………三五七

第一章 風雅とさびしをりの理念……………三五九

一 風雅の本質概念……………三五九

二 「さび」の美的本質……………三六二

三 「しをり」の美的本質……………三六八

第二章 風體と不易流行の思想……………三七六

一 不易流行の本質概念……………三七六

二 去來に於ける不易流行の説……………三八三

三 許六に於ける不易流行の説……………三八七

四 不易流行の美的本質……………三八九

第三章 去來・其角に於ける風姿と風情……………三九六

第四章 支考に於ける風姿と風情……………四〇四

一 風姿と風情の概念……………四〇四

二 姿情論の美的本質……………四〇七

本書に關係ある著者の著書論文目錄……………四一五

序

說



文藝は人間の思想と感情とが言語表象によつて具象的に表現された美的世界である。云ふ迄もなく文藝は言語による藝術であり、それは作品の形式に於て存在する。そして作品が文藝として認められるのは、その文藝性の認識によるものである。文藝作品は美と形成との二契機によつて形成された文藝形象の世界であり、しかもそれは文藝性として把握される。文藝は文藝性として認識されるものであり、作品としての言語的美的形象は人間の感情體驗中特に鑑賞作用によつて抽象的客觀的存在より具象的主觀的實在として認識されるのである。文藝の研究は文藝性の認識であり、作品の美的様式の究明である。と共に文藝性としての美を理論的及び歴史的に綜合的把握をなすことにある。即ち文藝の學的研究といふものは、文藝の本質としての美を美として鑑賞するだけでなく、かく鑑賞された美を眞の形に於て體系化し理論化することである。文藝研究に於て理論と歴史との綜合統一といふことはまことに必然性を持つものである。文藝性は文藝の本質を表象したものであり、この文藝性の學的究明が文藝研究の中心をしめるものである。この文藝性の究明に文藝研究の主體性が認められる。文藝の學的研究が文藝性を理論と體系の中に整理するといふことにあるが故に、それは必然的に文藝理論と密接に相關する。文藝理論の基礎づけのない文藝研究は、文藝批評に終るか又は好事家的言説に墮することは必定であり、そこには理論と體系とが認められない。文藝研究に於て文藝理論は極めて重要である。文藝理論は文藝の抽象的理論的認識であるから、文藝の本質は文藝理論によつて明らかにされるところが多い。日本文藝の研究に於ても、日本

文藝理論はその大きな規定性を持つて居るのである。文藝理論の研究そのものが文藝の研究であるとは云へないが、文藝理論をはなれた文藝研究はむしろ文藝批評であり、文藝の學的研究であるとは云ひがたい。この文藝を研究する學は文藝學であり、それは藝術學の一部分である。而してそれは一方に於て言語學と文獻學とに相關する。それは文藝が言語による藝術であり、また文獻に於て認識される文藝性の世界であるからである。文藝が言語的藝術であるといふことから、文藝に關聯して言語と文獻とが考へられ、文藝學と並んで言語學と文獻學とが關係して來ることには必然性があつた。従來文學研究の名によつて行はれて居た學問の領域は、實は文藝學と文獻學と言語學とが關係しながら存在して居たのである。嚴密に考へれば、従來の學としての文學といふ言葉はこれを解體して文藝學と言語學と文獻學との三つの領域に分けることが妥當的である。文學の學的研究を何んと呼稱するかといふ事にも適當な言葉のなかつたこの世界を學的に規定づけるためにも文藝學といふ言葉は極めて適當であり、これに關聯して文獻學と言語學とが成立するのである。茲に文學といふ言葉と文藝といふ言葉との關係が重要な問題を内包して居るのである。學問の世界ではない作品としての具象的世界に學の名稱をつけた處にそれを對象として研究する學問の世界との混同が存するのである。この點に於て學的研究との關係に於て、作品としての具象的な藝術の世界を文學とよんだところにこの言葉の致命傷にも似たものが存する。しかし文學を學的研究の對象としない者にはこの文學といふ言葉は優雅な言葉として認められるであらう。しかし文學作品の世界を學的研究の對象として認め、その學術的研究を行はんとする者にとつては文學といふ言葉は既に不適當であつて、文藝といふ言葉以外には適當な言葉はない。そしてその文藝を研究對象とする學を文藝學といふことも極

めて自然である。この文藝學は文藝の外部的なものとしての文獻と言語の研究に關係しながら、本質的には内部的な文藝性の究明を直接の研究對象とするのであり、文藝性の具象的認識の上に立つものである。

日本文藝を學的に研究する學問は日本文藝學である。従つて日本文藝學はこと新しい學問ではない。過去に於ては國文學の研究に於てなされて居たものである。その國文學の中には純粹に日本文藝學以外に日本文獻學や日本言語學が包含されて居たことは明らかであらう。従つて國文學や日本文學の研究とは別に新しく日本文藝學が存在するといふ風に考へることは適當ではない。それは從來の國文學といふものは、これを日本文獻學と日本語學と日本文藝學とに分けることが出来るのであり、だから國文學研究の領域を純粹に文藝の面に於て昇華したものが日本文藝學である。日本文藝學は突如として新しく成立したのではなく、國文學の中から文藝性研究をとりとりあげその學的研究が組織化されて學問の體系を持つに至つたと理解すべきである。文藝學の理論を以てこの日本文藝學の體系を考へられた岡崎義惠博士の學問的功績は極めて大きいものであるといへるであらう。

日本文藝を學的に研究する日本文藝學に於て、日本文藝理論は如何なる位置に於て如何に考へられるかの問題は、日本文藝學に於ても日本文藝理論研究に於ても重要な課題である。日本文藝の學的研究は單に日本文藝を鑑賞し批評するだけではなく、鑑賞され批評された文藝性を科學的に組織立てることであり、茲に理論的組織的把握が要請されるのである。文藝批評家の作品批評を以て學問的な文藝研究であることとみることは出来ないものであつて、把握された文藝の世界を學的に理論化することが必要なのである。この意味に於ても日本文藝の學的研究の世界で理論的なものに關與する點で日本文藝理論は重要な意義を持つものである。又日本文藝理論は日本美學の

主要な基盤をなすものであり、従つて日本文藝學の重要な基盤をなすことは云ふ迄もない。それは日本文藝理論は日本文藝に對する理論的抽象的認識であるからである。日本文藝學は美學に基礎を置くものであり、その美學は一般美學といふよりは日本文藝を直接に規定する日本美學であることが望ましいであらう。一般美學の概念で日本文藝の學的研究の基盤を考へようとすることは、一般と特殊、抽象と具象の關係をわきまへない考へ方であつて我々の取らない處である。日本文藝を中心として他のあらゆる藝術の美的世界より歸納的且つ抽象的に考へられた日本的美的世界の範疇概念を明らかにすることは、日本美學を創定する根據となるものである。斯くして日本美學を考へることによつて日本文藝研究の美學的基礎は具象的に確立されるのである。この意味で日本文藝の本質や價值に對する理論的認識の體系である日本文藝理論は日本美學に有力な規定を與へ、日本文藝研究の重要な基盤となるものであり、と共に日本文藝の本質形成の面で日本文藝研究に直接參加することにもなるのである。而して日本文藝理論は文藝性の抽象的認識を行ふ處に、文藝の具象的研究と相關するものであると云へる。

日本文藝理論は日本文藝に對する理論的抽象的認識であつて、それは個々の文藝作品に對する具象的認識や批評ではない。それは日本文藝全體に對する本質把握と價值認識とがその内容を形成して居る。文藝は人間の精神と直結して居る故に一つの全體的生命體であつて、固定化されたものではなく歴史の中にその生命と價值とが展開されて居るのである。文藝理論は文藝の本質と價值とに對する理論的抽象的認識であるから文藝批評とは異なる。文藝は人間の内部生命の本質的存在であると共にそれは歴史的存在でもあるが故に、眞の文藝研究は本質的認識と歴史的認識との綜合統一でなければならぬ。日本文藝も本質的存在であると共に歴史的存在であるが、

それは單なる歴史ではなく、具象的文藝性が歴史を通して流動し實在して居る美的世界である。この歴史的存在に對して單に實證的研究を行ふものであるならば、それは従來行はれて來た國文學史でも又は文化史でもよいのであり、又文藝理論を單に抽象的に研究するならば従來の文學概論でもこと足りるのである。日本文藝理論が日本文藝の學的研究に於て有力な基盤をなして居るといふことは、それが文藝性に深く關係して居ると云ふことである。文藝性の理論的把握といふ點に於て日本文藝理論の役割は大きいのである。日本文藝學が文藝性の具象的認識であるとすれば、日本文藝理論研究は文藝性の理論的抽象的認識であり、そしてこの研究が文藝性の認識を志向して居る點で日本文藝學と日本文藝理論とは密接に相關するのである。従つて文藝性の理論的抽象的認識に關與しない文藝理論の研究はあり得ない。日本文藝理論は日本文藝の中に見出される理論的抽象性の世界であり、文藝の具象性の世界と相關する。日本文藝理論の研究に於ても、又日本文藝の研究に於ても歴史と理論の綜合統一といふことは、極めて重要なことであり、歴史性の裏づけのない理論の展開は考へられない。日本文藝の世界に於ても文藝史を通して文藝性が把握されのであつて文藝史を無視して文藝の世界は考へられないのである。日本文藝の歴史的研究は日本文藝史學に於て行ふものであるが、文藝史學の成立する根據は文藝理論と史學との結合にある。而して文藝性は自身の中に歴史性を内包することから考へても、又文藝性の抽象的認識から考へても、日本文藝の研究に於て日本文藝理論の重要性が明白に認められる。文藝の歴史性を否定することは文藝が生命體として流動發展して居ることを否定することである。所謂文學概論と稱するものは文藝の歴史性を認めずに文藝は抽象的存在であるとして文藝を單に抽象的概念的のみ規定した。しかし文藝理論は文藝の歴史性といふ

ものを認めてその上に理論的認識の世界を明かにしようとするものである。文藝は歴史的存在として認められるものであるからその本質は形式論理によつて規定づけることは出来ない。文藝理論は文藝性の本質を把握し、文藝価値を認識しようとするもので、文藝理論の研究にも歴史的研究と體系的の研究との二つの面が存する。しかも眞の文藝理論の研究はこの歴史的なるものと體系的なるものとの綜合統一といふ點にある。例へば抒情文藝の韻律形態の研究もこれを形式論理的に抽象的考察を行はんとする従来の文學概論ではその本質を究明し得ないのである。これは文藝理論によつて韻律形態の持つ歴史性の究明を行つてはじめてその本質が解明される。それは韻律形態を單に抽象的概念とみるのではなくそれを歴史的具體として認識することが必要である。

日本文藝はその文藝性の中にその本質が認識される。文藝性は歴史なるものの上にその本質性が認識されるのであるから、日本文藝理論は日本文藝の歴史性と本質性の究明といふことが重要な研究對象となる。文藝理論は文藝の本質の把握と價值の認識であるから、文藝理論の歴史的研究は文藝の本質把握史と價值認識史とを構成する。勿論嚴密な意味に於ては日本文藝學の研究對象と日本文藝理論の研究對象は異なることは云ふ迄もない。たゞ兩者は文藝の本質性と歴史性との究明へ向ふ點で密接に相關する。文藝學の中心は文藝性を究明することであるが、文藝理論は歴史的具體としての文藝がいかに考へられ、そこに文藝への本質把握と價值認識がいかに行はれたかといふことを歴史と體系との綜合の中に明らかにしようとするものである。即ち文藝性の理論的抽象的認識である。日本文藝を歴史的なものであると見るとき、抽象性と具象性との連結、理論的なものと個體的なものとの相關、本質性と歴史性との關係を明らかにするところに日本文藝理論の命題がある。日本文藝理論は單なる